

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

クロニカとアンデス史研究： 「ナポリ文書」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2009-04-28 キーワード: 作成者: 染田, 秀藤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001660

クロニカとアンデス史研究

——「ナポリ文書」をめぐる——

染田 秀藤

大阪外国語大学

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 2-2. <i>EI</i> の構成と内容 |
| 2. ナポリ文書(「ミッチネリ・コレクション」) | 3. 論争の経緯と内容 |
| 2-1. <i>HR</i> の構成と内容 | 4. 今後のクロニカ研究 |

1. はじめに

わが国において、アンデス史、とりわけインカ期とスペイン支配期が本格的な歴史研究の対象となったのは1970年代のことであり、それには1960年代後半から70年代にかけて、アンデスの先住民文明に関する考古学者や文化人類学者の貴重な調査結果や研究成果が次々と公開され、欧米の研究者によるアンデス文明関係の基本的な文献が積極的に翻訳・紹介されたという背景があった。つまり、戦後の混乱期を脱して経済発展へ向かいはじめたわが国において、「移民政策」の対象地域から「経済発展」を支える資源の豊かな地域へと、ラテンアメリカへの視点が移行していった時代に、アンデス世界への知的関心が高まったのである。それは、とくに20世紀後半、世界におけるアンデス史研究を担うことになるジョン・H・ロウ、ジョン・ムッラ、トム・ゼイデマ、フランクリン・ピース、ナタン・ワシュテル、マリア・ロストウォロウスキなどに代表される考古学者、文化人類学者あるいは歴史学者が新しい視点にたつて学際的な調査研究活動を行い、その貴重な研究成果を精力的に世に問うた当時の学界の状況に呼応したものであった。そして、とりわけインカ支配期のアンデス世界を対象とする研究が東京大学の増田義郎教授(当時)を中心にエスノヒストリーを専門とする研究者たちによって進められた。そのとき、重要な一次史料として利用されたのが、とくに16、17世紀にスペイン人征服者、宣教師、役人、植民者、学者などが「新世界」(この場合はアンデス世界)について書きつづったクロニカと総称される記録文書であり、そうしてわが国においてはじめて、スペイン語で記された一次史料にもとづいて「インカ帝国」の歴史が描出された。

しかし、先スペイン期のアンデス世界、中でも「タワンティンスーユ」(俗に「インカ帝国」と呼称される)の成立から滅亡にいたる歴史を再構築し、その歴史の意味を解明するためには、同じくクロニカに依拠して創出された伝統的な欧米型「インカ帝国史」を再検討する必要がある。ピースの言葉を借りれば、「16世紀の幕が閉じる以前に、アンデスの歴史はクロニスタ(クロニカの著者)によって確定された」(Pease 1995: 77)からである。いわゆる「アンデス史のヨーロッパ化」である。したがって、歴史学者には、

クロニカの読み直し——分析・批判・解釈——と新しい史料の発掘、それに考古学者や文化人類学者との学際的な共同研究が急務となった。その際、岩波書店によるクロニカの翻訳刊行が重要な役割を果たしたのは言うまでもない（とくに大航海時代叢書第2期とエクストラシリーズ）。換言すれば、わが国における本格的なクロニカ研究は「大航海時代叢書」の刊行をもって嚆矢とするのである。

そうして、先スペイン期の先住民文明、なかでも従来のインカ帝国像やスペイン人によるペルー征服の歴史の虚偽性が解き明かされ、その実像に迫る研究が行われるようになった。またT・トドロフの『他者の記号学——アメリカ大陸の征服——』（トドロフ1986）の出版を契機に、フーコーの“ディスケール”概念やグラムシの“文化のヘゲモニー”概念を援用したサイードの“オリエンタリズム”的視点から、クロニカと植民地主義言説との密接な関係を解明し、クロニカを批判検討する研究も発展することになった。すなわち、クロニカは先スペイン期の先住民文明やスペイン人の征服・植民活動を可能なかぎり客観的に再構築するための史料、もしくは、“オリエンタリズム”の脈絡に位置づけられる文書として取り上げられたのである。

一方、欧米のアンデス史研究者が視点を「コロンブス」から「先住民」へ移し、スペイン支配下における先住民の生存戦略へ向けるのに、さほど時間はかからなかった。「新大陸到達」500周年を前に、80年代後半から、伝統的な先住民像に大きな変化（受動的先住民像から能動的先住民像へ）がみられ、世界的な規模で学界を支配しはじめたのである。それには、とりわけアンデス世界におけるキリスト教受容の実態解明を試みた文化人類学者の果たした役割が大きかった。歴史学者はその成果をフィードバックし、先住民社会のダイナミズムを史料に依拠して解明するようになり、500周年を前に新しい史料——巡察記録、訴訟文書、裁判記録、教会文書、遺言書など——が数多く発掘・公刊されたことにより、スペイン支配下における先住民の生き様を明らかにする研究が主流を占めるにいたった。そうして、「時間をもたない他者」としてその歴史的存在を抹殺されつつけてきた人たちの記録——個人的、集团的とを問わず——が重視され、先住民がスペイン人の侵略や文化的強制に対して示した反応（リスポンス）の実態を分析することにより、先住民文化の特徴を解明する作業が行われるようになった。それは、彼らの本質的な伝統や精神的枠組み、それに行動・思考様式が先スペイン期よりも征服以後の時期に顕著に認められると考えられたからにはほかならない。しかし、言うまでもなく、その作業を進めるにあたり、スペイン人と先住民の「衝突」が後者に政治的にも社会的にも想像を絶する劇的な変化をもたらした未曾有の出来事であったことは無視されてはならないし、先住民が征服以後、以前と変わらない諸々の権利や地位、繁栄や安寧を享受していたわけではないことも看過されてはならない。

そのような研究を推し進めるうえで、クロニカ、とくに、先住民が独学で習得した「文字」（アルファベット）と「言語」（スペイン語）を駆使して著したクロニカが重要な

一次史料としての価値を備えているのは言を待たない。しかし、1996年、従来のアンデス文明像とスペイン人によるペルー征服の歴史を覆すような記録文書（「ナポリ文書」）の存在が伝えられ、その結果、大勢のアンデス史研究者を巻き込んだ論争が生起し、これまでのクロニカ研究に一石が投じられた。本稿では、その論争に1996年以来立ち会った当事者の一人として、まず「ナポリ文書」、つづいてその文書をめぐる論争の経緯と内容を簡潔に紹介し、最後に今後のクロニカ研究のあり方を考察したい。

2. ナポリ文書（「ミッチネリ・コレクション」）

ナポリ文書は、同市にあるミッチネリ家の古文書館で“発見”された『ペルーの言語の歴史と原理』*Historia et Rudimenta Linguae Piruanorum*（以下HRと略記：図1）と『プラス・バレラの不名誉な追放』*Exsul Immeritus Blas Valera Populo Suo*（以下EIと略記）の二つの文書群に付された総称である。二つの文書群は、それぞれ公表された時期が異なり、HRは1989年、EIは1998年に「発見者」である同家のクララ・ミッチネリと数名のイタリア人学者——中でも積極的な支持者はボローニャ大学の考古学者ラウラ・ラウレンチク・ミネリ——により、その存在が公にされた。しかし、残念ながら、原本は広く研究者に公開されていないため、ここでは主にミッチネリとラウレンチクの解釈に従って、その構成と内容を簡単に紹介する。

2-1. HRの構成と内容

HRは9葉のフォリオ（二折版）と3葉の半フォリオで構成され、前者は以下の4つの文書に区分される。

(1) ラテン語文書：JACというイニシャルの署名入り（図2, 3, 4）。

- ① マヤチャク・アスアイと名乗るクラカカの語るプラス・バレラの話：プラス・バレラは先住民の権利の擁護者であり、アンデス住民の精神的な指導者である。バレラによれば、先住民は偶像崇拝者ではなく、その信仰はキリスト教信仰と完全に一致する。ペルーのイエズス会管区長フワン・デ・アティエンサがバレラをその親インディオ的態度を理由にイエズス会から追放しようと画策した。
- ② インカ貴族など、高貴な身分の人たちだけが利用したキープ（quipu regale）が存在し、バレラはその表記と解説の方法に精通していた。
- ③ ペルーの先住民語であるケチュア語の文法に関する説明と語彙集（56個のケチュア語単語とそのスペイン語訳）。

(2) 暗号文書A：数字を羅列した文書。JAOというイニシャルの署名入りで、1637年7月30日の日付（図5, 6, 7）。

- ① プラス・バレラ同様、JAOもペルーの先住民に関して真実を書いたためにイエズ

ス会内部で冷遇された。

- ② インカ人は創造神の存在を認識していたし、彼らは一般の人々が知らないキープをもち、それには真実のインカ史が記されていた。
- ③ キプカマヨックのチャワルラクの語るインカ史。
- ④ アンデスの習慣（頭蓋骨の変形と少女のクリトリス切除）を批判。
- ⑤ カハマルカにおいてインカ王アタワルパが捕縛されたのは、フランシスコ・ピサロが3名のドミニコ会士と謀り、王の護衛にあっていた部将たちに毒入りの葡萄酒を飲ませた結果である。

(3) 暗号文書B：これも②と同じく、数字を羅列した文書。JAOというイニシャルの署名入りで1638年5月7日の日付。

- ① プラス・バレラはピサロの姦計を書に認めてローマのイエズス会総長（アクワヴァ）へ送付したが、総長が彼の追放を画策したため、自己弁護のため、ローマ行きを申請した。しかし、申請は却下され、スペインへ追放された。
- ② バレラは総長よりイエズス会からの追放もしくは偽装死を強要されたため、後者の道を選び、インカ帝国の歴史に関して著した手稿をエル・インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガに手渡した。しかし、『インカ皇統記』を著したインカ・ガルシラソは恣意的にその内容を歪曲・批判・割愛した。
- ③ 1597年、すなわちイギリス人がカディスを攻略したその翌年、バレラは死を偽装し、そして1598年6月、ひそかにペルーへ向けて出航し、クスコでメステイソのイエズス会士GR（ゴンサロ・ルイスと同定される）らに歓迎され、先住民たちの間に身を隠して暮らした。
- ④ 1611年、バレラは『新しい記録と良き統治』*Nueva Crónica y Buen Gobierno*（以下、『新しい記録』と略記）を著したが、公式にはすでに死んだものとみなされていたため、著者として自分の名前を使うことができなかった。そこで、「傲慢で虚栄心が強い」と噂された先住民のグアマン・ボマが選ばれ、作品の著者として名前を貸した。
- ⑤ その後1618年に、バレラは再びスペインへ戻り、翌年他界した。

なお、(2) と (3) の暗号文書が分量にして全体の三分の二（6葉）を占める。

(4) スペイン語文書：イエズス会士ペドロ・デ・イリャネスの覚書（1737年）。HRが自分の手に渡った経緯を記したもの（図8）。

一方、後者、つまり、3葉の半フォリオも数字を羅列した文書で（暗号文書C）、「スマック・ニュスタ」（“美しい娘よ”の意）という韻文を記した多彩色の「高貴なキープ」の絵とそれを説明したもので、プラス・バレラの署名があるとされる。

ラウレンチクによると、JACもJAOとともに、17世紀前半にペルーの福音活動に従事したイタリア生まれのイエズス会士で、JACはジョバンニ・アントニオ・クミス（スペイン

語名Juan Antonio Cumis), JAOはクロニスタとしても有名なジョバンニ・アネロ・オリバ(スペイン語名Juan Anello Oliva)を指し、二人とも、伝道方針をめぐるイエズス会の上長らと意見を異にしていた。

以上がHRの伝える重要な情報であり、要約すれば、HRは①メスティーソのイエズス会士プラス・バレラに関する新情報——とりわけ偽装死とインカ・ガルシラソとの関係、それに、これまでグアマン・ボマの作品とされてきた『新しい記録』の著者がバレラであること——、②新しいキープの存在と③アタワルパ捕縛にかかわるF. ピサロの陰謀を記したセンセーショナルな文書である。なお、後述するように、HRは、そのすべての文書が同時に公にされたわけではない。

2.2. EIの構成と内容

EIは合計22葉のフォリオからなる文書で、以下の二篇の文書で構成されている。

- (1) プラス・バレラが書き残した自分史。全体の19葉を占める。
- (2) バレラの親戚にあたる征服者フランシスコ・チャベスがカルロス一世に宛てた報告書簡(1533年8月5日付け)

以上の文書以外に、封印された二つの封筒があり、それには、円盤状の銀製耳飾、蠟でできたメダルやレリキアのほかに、コロンブスの自筆書簡の断片やグアマン・ボマが名義貸しの代償としてイエズス会士から牛車と馬を受け取ることを記した契約書などが入っていた。

- (1) の文書は内容から、以下の四部に分けられる。

- ① プラス・バレラの生涯：HRの内容とほとんど変わりがなく、補足情報がいくつか記されている(例：先住民女性との間に一子をもうけたが、スペイン人支配下で苛斂誅求に苦しむ先住民を救うため、イエズス会士になることを決意したこと。イエズス会総長アクワヴィヴァが姦通罪で自分をイエズス会から追放しようと画策したこと。ホセ・デ・アコスタを批判したこと¹⁾。自著に関する情報、なかでもインカ帝国のことを記した作品の手稿を受け取ったインカ・ガルシラソが『インカ皇統記』の中で、とくにキープに関する説を批判し、虚偽よばわりしたので、GR(ゴンサロ・ルイス)とAO(アネロ・オリバ)の協力を得て『新しい記録』を執筆し、GRが線画を担当したこと。)
- ② アンデスの言語(ケチュア語)、キープとアンデス住民の世界観：文書全体で、この部分の記述がもっとも多く、とくにキープに関してさまざまな情報が伝えられ、セケ・システムに関する記述もある。
- ③ スペイン人によるペルー征服とアンデス文化の破滅的な現状への慨嘆：線画とケチュア語文章が挿入され、ドミニコ会士フワン・デ・イエベスがピサロと謀って葡萄酒に毒を混入したことなどが記されている。

- ④ アンデスの福音化：キリスト教の布教を通じてアンデスに理想的なキリスト教世界が生まれることへの確信が示され、征服の真実を明かすことで、先住民を擁護する決意を固めたことなどが記されている。

一方、(2) のチャベスの書簡は、ピサロが3名のドミニコ会士（ビセンテ・バルベルデ、フワン・デ・イエベス、レヒナルド・デ・ペドラサ）と協議して、インカ王アタワルパを捕らえるため、王に仕える部将や護衛兵に毒入りの葡萄酒を飲ませる計画を立てたこと、そして、実際にはアタワルパにその葡萄酒を飲ませて防衛できないようにして捕縛したことを記している。そうして、チャベスは征服の不当性を暴き、ドミニコ会士たちに激しい非難を浴びせる（Micchinelli 1998；Laurencich：1996, 1998, 2000）。

以上の要約から容易に推察できるように、EIには、HRが伝えるセンセーショナルな情報の信憑性を裏付ける内容の情報が数多く記載されている。

3. 論争の経緯と内容

1989年、ナポリの歴史家クララ・ミッチネリは同僚のカルロ・アニマトらと共著で『キープ：謎に包まれたインカ王たちが用いた物語の結縄文字』*Quipu: Il Nodo Parlante dei Misteriosi Incas* と題する小冊子をジェノヴァで出版した。その作品で、ミッチネリはHRのラテン語文書と、彼女自身が解読したと述べる暗号文書A（1637年7月30日付け）の複写版とそのイタリア語訳、スペイン語文書、それにいくつかの絵を紹介した。ミッチネリによれば、それらの絵はインカ時代に数量的な情報と王朝の歴史を記録に留めておくために用いられた特別なキープであり、これまで知られていたキープとはまったく異なるものである。さらに、ラウレンチクラがアントニオ・クミスの作とみなすラテン語文書は、ペルー北部チャチャボヤ生まれのメスティーソのイエズス会士プラス・バレラに関して、新情報をもたらした。公式記録によれば、バレラは1544年にスペイン人と先住民女性の間に生まれ、68年にイエズス会士となり、ケチュア語、アイマラ語とラテン語に精通し、ワロチリ、クスコ、フリ、ポトシで布教活動に従事したが、上長に冷遇されて96年にスペインへ追放され、翌年マラガで死去した。また周知のとおり、バレラは、インカ・ガルシラソが『インカ皇統記』でインカ帝国やスペイン人によるペルー征服と宣教活動について記すときに典拠とした重要な作品（『インカ史』*Historia de los Incas* 原本は散逸）の著者であり、『ペルーの先住民の風俗習慣に関する報告書』*Relación de las costumbres de los naturales del Perú*の作者とも考えられている²⁾。しかし、HRのラテン語文書に見るバレラはそれとはまるで異なり、伝統的なアンデス宗教の復活、もしくは、護持を目指して破壊的かつ土着主義的な運動を指導した人物である（Micchinelli 1998: 47-54）。

さらに、“解読された”暗号文書A——ラウレンチクは作者をアネロ・オリバと同定——には、特別なキープ（quipu regale）の存在、インカ起源に関する新説（タタール

Tartaria説) やピサロと3名のドミニコ会士によるアタワルパ捕縛の謀議(毒入り葡萄酒)などが記され、最後に、先住民のウアマン・ポマUaman Poma(グアマン・ポマ)から習ったとして、象形文字が18体、描かれ、それぞれに簡単な説明が付されている(Miccinelli 1998: 70-74)。すなわち、暗号文書Aには、アンデス文明やペルー征服に関するこれまでの定説を覆す内容の情報が数多く記述されているのである。

ミッチネリとラウレンチクは、そのように極めてセンセーショナルな内容の文書の存在を明らかにし、その複写版とイタリア語訳を公にしたにも拘わらず、学界の関心を惹かなかったためか、1995年、パリにあるアメリカニスト学会の事務局に同文書の学会誌への掲載許可を申請した。申請を受けて、学会当局は審査委員を数名任命し、文書の査読と評価を依頼した。一方、審査継続中の1996年、ラウレンチクらはローマで再びHRを出版し、そのローマ版には、暗号文書Aのみが掲載されたジェノバ版と異なり、三篇の文書(暗号文書A・B・C)がまったく予告もなくアネロ・オリバの作品として掲載され——暗号文書B・Cはそれぞれ解説版のみ——、その結果、HRの信憑性をめぐって激しい論争が生起することになった。

しかし、論争の火蓋はそれ以前に切って下ろされた。先記の審査委員からの報告を受けて、学会事務局が文書の掲載を不可とする決定を下したからである。その決定を不服として、ラウレンチクらはメディアを通じて新史料の発見の情報を流す一方、審査委員の一人フワン・カルロス・エステンソロを名指して批判した。その批判に対し、エステンソロは1996年9月リマの雑誌*Sil*に『欺瞞の歴史か歴史的な欺瞞か』¿Historia de un fraude o fraude histórico?というやや挑発的な題名の論文を投稿し(Estenssoro 1996)——同論文は翌年、著名な学術雑誌*Revista de Indias*にも掲載された——、HRが偽造文書と判断される根拠を明らかにした。以下に、エステンソロの見解を簡潔に紹介するが、審査委員が査読の対象にしたのはHRのうちラテン語文書、暗号文書A——暗号文書Bは審査中にローマで公刊——とペドロ・イリャネスの作といわれるスペイン語文書(1737年)であり、いずれも原本ではなく、複写版であった。つまり、ラウレンチクらは原本ではなく、複写版を提出したのである。

エステンソロは、複写版では断定不可能だと前置きしながら、使用されている紙が17世紀のものであっても、文書が17世紀に著されたものとは限らないことをいくつかの証拠を挙げて説明したあと、さらに、ラウレンチクが「プラス・バレラは先住民の主題を先住民の技法で記した」と述べ、文書の保存状態および線画に用いられている先住民のインクと技法を証拠にその信憑性を主張するのに対して、先スペイン期のペルーの先住民には紙に文字を記すような技法が存在しなかったことから、それらには十分な証拠能力がないと判断した(Estenssoro 1996: 48-49)。つづいて、彼は、字体から判断して、HRは異なる三人の人物によって書かれたものだが、ラテン語文書は羽根ペンではなく筆のようなもので書かれ、暗号文書Aはアネロ・オリバの作と断定する証拠に欠け、スペイン

語文書は句読点の打ち方からも18世紀の作とは断定できないと論じた (Estenssoro 1996: 49-50)。さらに、エステンソロはラテン語文書に現れる語彙を取り上げ、とくに“genocidium” (“大量虐殺”の意) という言葉に着目した (図9)。そして、その言葉がはじめて用いられたのは1944年、つまり第二次世界大戦末期のことであり、17世紀の文書に現れるはずがないと論じ、さらに文書には現代語に近い用語がいくつも認められると主張した (Estenssoro 1996: 51)。

また、エステンソロは、ラテン語文書と暗号文書Aに時々使用されているスペイン語の表記に誤りがあると指摘し、その誤りを作者がイタリア人であるという理由で無視するラウレンチクに対して、1630年ころ流暢なスペイン語でクロニカ『ペルー王国と諸地方に関する歴史ならびに令名高きイエズス会士たちの生涯』*Historia del reino y provincias del Perú y vidas de los varones insignes de la Compañía de Jesús*を著したアネロ・オリバがそのような過ちを犯すはずがないと反論し、さらに、意味不明なケチュア語表記に関しても、同様の論陣を張り、JAOをアネロ・オリバとみなすのは不可能だと主張した (Estenssoro 1996: 51-52)。そのように、エステンソロは文書の内容よりも、文体、字体、使用されている用語などの分析を集中的に行い、HRを近年に作成された偽造文書であると結論づけた。

一方、ラウレンチクは新たに暗号文書B (解読版) を加えてローマでHRを出版し、1996年6月、筆者も参加した第4回国際民族史学会 (ペルー・カトリック大学主催) で、同文書を論拠に、プラス・バレラを『新しい記録』の著者と断定するセンセーショナルな研究発表を行った。その結果、ラウレンチクとエステンソロの間で生じた論争はHR、とくに暗号文書Bの内容をめぐる論争へ発展し、ジョン・H・ロウ、トム・ゼイデマ、フワン・オシオ、メルセデス・ロベス・バラルト、フランチェスカ・カントゥー、ロレナ・アドルノ、ハビエル・アルポーなど、代表的なアンデス史研究者が大勢、HRの史的価値や暗号文書Bの信憑性をめぐる問題に取り組むことになった。その中で、注目されたのは、デンマーク王立図書館所蔵の『新しい記録』の原本を詳細にわたって調査し、ゲアマン・ボマ研究に新しい道を切り開いたイエール大学教授ロレナ・アドルノの動向であった。

アドルノはもともと1996年にエステンソロの論文が公表されたことで、HRをめぐる「お遊びは終結した」と考えていたが、HR、とくにラテン語文書Bの情報がインターネットを通じて世界中に広がり、プラス・バレラを『新しい記録』の著者とみなす新説が一人歩きするのを知って独自にHRの研究調査に乗りだした (Arana B. and Rodríguez Q. 2001: 11)。そして、彼女はペルー・カトリック大学社会科学部発行の学術雑誌 *Anthropológica* 第16号 (1998年発行) に「立証のさまざまな基準：ナポリのミッチネリ文書とペルー征服に関するクロニカ」“Criterios de comprobación: el manuscrito de Miccinelli de Nápoles y las crónicas de la conquista del Perú”と題する論文を発表し、HRに関する最初の見解を明らかに

した——同論文はアレリャノとロドリゲス・ガリドが編集した論文集に再録されている (Arellano and Garrid 1999) ——。アドルノはまず、新しい文書が発見された場合、さまざまな分野の権威ある専門家たちによる慎重な研究と評価が必要だと論じ、*HR*の原本がミッチネリとラウレンチクを中心とする一握りのイタリア人研究者の間でしか明らかにされず、独立した専門家による科学的調査が行われていないことに不信感を示し、エステンソロ説にもとづいて文書自体の信憑性に疑義を呈した (Arana B. and Rodríguez Q. 2001: 20-22)。つづいて、アドルノは暗号文書に触れて、暗号 (数字) の解読方法が説明されていないことを指摘し、さらに、アネロ・オリバと同定されたJAOがバレラの謎めいた生涯をわざわざ暗号を用いて語っていることや、JAOが『新しい記録』に特化してバレラのひそかな作品執筆の計画を明らかにしていることに疑問を抱き、まず必要なのは文書に使用されているインクの化学分析と暗号の専門家による精密な調査研究だと主張した (Arana B. and Rodríguez Q. 2001: 22-26)。

さらに、アドルノはとくに暗号文書Bに記載された情報の中から、プラス・バレラとインカ・ガルシラソの関係に触れた箇所を取り上げ、文書の作者と目されたアネロ・オリバが自著のクロニカの中でインカ・ガルシラソの作品に讃辞を贈り、インカ・ガルシラソの情報をくりかえし引用している事実をあげて、JAOをアネロ・オリバとみなすラウレンチク説に異を唱えた。アドルノによれば、3人の作品はそれぞれテキストとして連結し、インカ・ガルシラソがバレラの作品を、アネロ・オリバがインカ・ガルシラソの作品をそれぞれ信頼の置ける文書として高く評価しているのは数多くの史料で裏付けられており、『新しい記録』がグアマン・ボマの作品であることを実証する史料も複数、現存する³⁾。したがって、アドルノは、*HR*が4人のクロニスタ、つまり、バレラ、インカ・ガルシラソ、グアマン・ボマとアネロ・オリバに関して現存する数多くの史料を否定する内容の稀有な文書であることから、早急に第三者、すなわち、国際的に権威のある中立的な専門家や研究機関の調査にゆだねるべきだとくりかえし強調して文を結んだ (Arana B. and Rodríguez Q. 2001: 28-40)。

しかし、ラウレンチクらは原本の全面的な公開や中立的な専門家や研究機関による調査を拒否し、1998年夏、*HR*のラテン語文書を複写して出版するとともに、同じくミッチネリ古文書館で新しい史料が発見されたと発表し、その内容を公表した。それが*EI*と総称される文書群である。ラウレンチクらによれば、その文書群には、中心的な文書であるプラス・バレラ自身の著作『プラス・バレラの不名誉な追放』以外に、ピサロの謀議 (毒入りの葡萄酒) を国王に訴えた征服者フランシスコ・チャベスの書簡と、『新しい記録』の作者として名前を貸したグアマン・ボマと3名のイエズス会士の間で取り交わされた契約書 (名義貸しの代償としてグアマン・ボマが馬や牛車を受け取ること) が含まれた——最初に公表されたのはその契約書の存在——。ラウレンチクによれば、*EI*は*HR*を補完する文書であるが、むしろ、*EI*は、*HR*の公表後、その信憑性をめぐって研究者か

ら出されたさまざまな疑問や意見に答える文書だと言える。その結果、『新しい記録』の著者をめぐり、論争はさらに激しさを増した⁴⁾。

そのような状況の中、1999年6月ローマにおいて、近々の研究成果をもちよって意見交換することと、HRとEIを公開することを目的に、イタリアのラテンアメリカ協会がペルー・カトリック大学とポロニャ大学の協賛をえて、グアマン・ポマとブラス・バレラをめぐる国際会議を開催した。会議には、ミッチネリ、ラウレンチクをはじめ10名のイタリア人研究者以外に、ロレナ・アドルノ、フワン・オシオ、トーマス・カミンズ、モニカ・バーンズ、ラケル・チャン・ロドリゲス、T・ゼイデマ、リリアナ・レガラド、マルコ・クラトラなどの研究者が招かれ、筆者も「ラス・カサスとグアマン・ポマ——インカ帝国像をめぐる——」と題する発表を行った。同会議における研究発表の内容については、2001年にイタリアのラテンアメリカ協会から『グアマン・ポマとブラス・バレラ——アンデスの伝統と植民地史——』*Guamán Poma y Blas Valera. Tradición Andina e Historia Colonial*というタイトルで会議録が公刊されているので（出版社はローマのAntonio Pellicani Editore）、ここで詳しく述べるのは控えるが、特記しなければならないのは、会議で報告された文書の科学的調査の結果がすべて、イタリア人研究者によるものだったことである（Istituto Italo-Latinoamericano 2001: 171-194）。イタリア人研究者をのぞく会議参加者は全員、HRおよびEIの全面的な公開を期待したが、残念ながら原本は閉じたままガラスケースに入れられ、短いコーヒープレークの間、公開されたにすぎなかった。すなわち、ラテン語文書も暗号文書も全面的に公開されなかったのである。オシオが述懐しているとおり、会議ではミッチネリをはじめイタリア人研究者たちが秘密主義的な態度を貫きとおしたため、大部分の会議参加者の期待は完全に裏切られた（Ossio 2000: 115-116）。

その後も、ラウレンチクはさまざまな雑誌やメディアを通じて自説をくりかえし論じているが（Laurencich 2004）、いまだHRもEIも、アドルノが主張した第三者の独立した専門家や研究機関による精密な調査に委ねらず、EIにいたっては、複写版すら公表されていない。ラウレンチクは自説を論証するのにしばしばハイランドの研究を利用しているが、ハイランドの研究はブラス・バレラの生涯に新しい光を当て、アネロ・オリバが「ナポリ文書」の作成に積極的に関わった可能性を認めているものの（Hyland 2003: 195-213）、バレラが『新しい記録』の著者であることを決して証明するものではない。すでに別の機会に明らかにしたように（染田・友枝 1992: 129-149）、『新しい記録』に認められる著者の主張は、インカ支配期における偶像崇拜に関する見解ひとつを取り上げても、HRやEIに描かれているブラス・バレラの見解とはまったく相容れない。また、もし作品を通じて植民地社会におけるメスティーソの存在を厳しく非難した著者がメスティーソのバレラだとすれば、数々の矛盾が生じるが、ラウレンチクらはそのことを認識すらしていない。換言すれば、『新しい記録』とグアマン・ポマに関して、ラウレンチクらの知

識はあまりにも乏しいと言わざるをえない。アドルノは2001年にデンマーク王立図書館所蔵の『新しい記録』の原本をデジタル化して広く一般に公開し、2002年にはそのCD Rom版を公刊したが、それは、ひとつにはナポリ文書をめぐる論争を契機に従来のクロニカ研究に問題が潜んでいることを鋭く看取したからだと言えるだろう。2004年の現在、論争は沈静化しているものの、また「新史料の発見」というセンセーショナルな情報がインターネットを通じて世界中を駆け巡る可能性は否定できないからである。

4. 今後のクロニカ研究

かつてピースは、クロニカを無批判に史料として受け入れてタウンティンスーユをユートピア的な「インカ帝国」として描いた欧米におけるアンデス史研究に問題性を嗅ぎ取り、アンデス史を専門とする歴史家がクロニカを史料として扱う場合に注意しなければならぬ事柄をいくつか指摘した。ピースによれば、アンデス史（とくにインカ史や征服史）を解明するのに、クロニカに記されている神話・伝説などの分析と植民地時代の巡察記録など、地方行政文書の発掘・研究を通じてアンデス文化——時間観念、世界観、儀礼的行為の社会的機能や意味など——を読み解く作業が必要不可欠であった（Pease 1978: 31-114）。その後も、ピースはクロニカを史料として扱う場合、記述されている情報の出所に関する緻密な研究が必要であることをくりかえし強調し、とくに無文字社会であったアンデス世界の場合、先住民を情報提供者とする記述に関しては、意思疎通の問題（情報提供者と書き手の関係）を無視できないと指摘すると同時に、異なるクロニカ同士をつなぐ情報の鎖に注意を払うべきだと説いた（Pease 1995: 15-136）。それはクロニカを独立した個別の作品として扱うことへの警鐘であり、先行するクロニカに記載された情報が次々とそれ以後のクロニカに伝えられていくという、いわばクロニカ間の垂直的な関係に注意を喚起したものであった。シエサ・デ・レオンにはじまりベルナベ・コボへと受け継がれるインカ単一王朝説はその典型である。

そして、今回の「ナポリ文書」をめぐる論争はそれとは別の意味で、従来のクロニカ研究の問題点を浮かび上がらせることになった。つまり、これまでのクロニカ研究においては、著者（クロニスタ）の人格に過大な信頼が置かれたことと、クロニカがクロニスタ個人の完成した作品として取り上げられる傾向が強かったことが明らかになったのである。

これまでグアマン・ボマは独学で身につけたスペイン語を駆使して、スペイン人の黄金崇拜を批判し、アンデス住民の古くからのキリスト教的信仰を弁じ、スペインによる征服の権原の正当性を否定し、布教活動に従事する司祭を批判し、アンデス文化の復活を目指し、植民地支配体制を厳しく批判した植民地時代初期の稀有な先住民知識人と考えられてきた。『新しい記録』から創出されたそのようなグアマン・ボマ像が次第に実像

として受けとめられ、ついにはグアマン・ポマは「解放の神学」の先駆者として高く評価されるまでにいった⁵⁾。一方、すでに指摘したとおり、HRとENによれば、『新しい記録』の著者であるメスティーツのイエズス会士プラス・バレラはペルーの先住民の権利を擁護し、アンデスの伝統的な宗教をキリスト教と調和したものと考え、スペイン人の征服を断罪し、黄金欲に駆られたスペイン人がアンデス住民に加える拷問を批判し、キリスト教の布教に関しては所属するイエズス会の方針に異を唱えて冷遇された人物である。すなわち、『ナポリ文書』に描かれたプラス・バレラはまさしく伝統的なグアマン・ポマ像とみごとに符号するのである。

ところが、グアマン・ポマに関して、伝統的な人物像とは異なる一面を伺わせる史料が現存する。それは、1590年代にグアマン・ポマが親族らとともに、亡き父ドミンゴ・グアマン・マルキの領有地をめぐる起こした土地訴訟に関わる数々の法律文書や請願書を編纂したブラド・テリオ文書*Expediente Prado Tello*と名づけられた史料で、1991年にリマで『おてあげ』*Y no hay remedio*と題する作品に収録されて出版された (Guamán Poma de Ayala 1991)。グアマン・ポマ一族が土地訴訟を起こしたことやグアマン・ポマが1600年に追放刑を受けたことはその裁判記録 (*Compulsa ayacuchana* 1977年に公刊) で裏付けられているし (柴田・友枝 22-24)、ブラド・テリオ文書も『新しい記録』の中でグアマン・ポマが語る土地訴訟の経緯を一部、立証している。しかし、その文書から伺えるのは、彼が『新しい記録』の中に書き記した「キリストの貧しき民の擁護者」としての自画像とは大きく異なり、自己の土地や財産を取り戻すのに躍起になる一人の先住民であり、アンデス住民によるアンデス支配の復活を目指したクラーカのグアマン・ポマの姿である (Guamán Poma de Ayala 1991: 159-375)。したがって、土地訴訟をめぐる裁判記録やブラド・テリオ文書、それに『新しい記録』を照合すれば、グアマン・ポマが『新しい記録』の執筆を決意したのは、訴訟に敗れ、クラーカの地位も失って、植民地体制に大きな失望感を抱いた結果であると言える。そのように、クロニスタが描く自画像 (作品をもとに創出される人物像) と関連史料との照合から浮かび上がる人物像は必ずしも一致するとは限らないし、もしクロニスタの描く自画像と客観的な史料にもとづく人物像が一致しない場合、クロニカ解釈に大きな違いが生じる可能性は否定できない。その意味で、今回の論争は、クロニスタの自画像に過大な信頼をおいてきた従来のクロニカ研究に警鐘をならし、クロニスタの人格をクロニカと関連史料にもとづいてできるかぎり客観的に明らかにするのが今後のクロニカ研究に必要な作業であることを示唆している。

すでに指摘したように、現存する史料は、『新しい記録』が先住民グアマン・ポマの作品であることを裏付けているが、それは必ずしも彼個人の手になる文書であることを証明するものではない。ラウレンチクラが、プラス・バレラには協力者としてGR (ゴンサロ・ルイスと同定) とAO (アネロ・オリバと同定) がいたと論じ、線画を担当したのは

GRだと主張したように、作品執筆時の著者の年齢、作品の規模や体裁などを考慮すれば、グアマン・ポマが一人で『新しい記録』を完成したとは考えにくい。そこで問題となるのが、16世紀末ころアンデスで伝道活動に従事していたメルセス会士マルティン・デ・ムルーアとグアマン・ポマとの関係である。

ムルーアの著した『歴代インカ王の起源とその歴史』*Origen e Historia de los Incas*に挿入されている水彩画と『新しい記録』に収められている450枚を越える線画との間に類似性が認められることから(図10)、両者の関係は以前から指摘されていた⁶⁾。それだからこそ、ラウレンチクは、GRが自分の描いた線画をグアマン・ポマに売り渡し、グアマン・ポマがそれをムルーアに提供したと論じた。ムルーアのクロニカが16世紀末(1590年?)に書かれたものと考えられていることからしても、ラウレンチク説は説得力を欠いている。しかし、それ以上に重要なのは、1996年、フワン・オシオが散逸したと考えられていたムルーアの手稿の写本(ロヨラ版:112枚の水彩画を含む)をアイルランドで発見したことである(Ossio 1998)。その結果、グアマン・ポマが1580年代にムルーアのもとで働いたころ、西欧風の絵画技法を学んだことや、『新しい記録』に収録されている線画がグアマン・ポマ個人の手になるものではなく、彼の一族との共同作業によるものであること、線画には伝統的な土着の絵画技法が認められることなどが裏付けられた。そのうえ、1998年には、言語学的分析によって、『新しい記録』の手稿(デンマーク王立図書館所蔵)がグアマン・ポマを含め、少なくとも複数の人間の手で書かれていることが判明した(Adorno 1999)。したがって、『新しい記録』が多くの先住民——グアマン・ポマとその家族、それに、おそらくグアマン・ポマが作品の中でくりかえし記している彼の「弟子」たち——の協力を得て完成されたものである可能性は高く、そのことは作品が集団的性格を帯びていることを意味している。そうだとすれば、『新しい記録』はグアマン・ポマ個人の特異な作品ではなく、植民地時代初期の先住民の社会と文化の一端を映し出した作品といっても過言ではないだろう。したがって、クロニカが完成されるまでの過程を検討するのはきわめて重要な作業となるのである。そのように見てくれば、例えば、従来、第五代バルー副王トレド時代に「インカ専制君主説」を捏造するために作成されたとされるサルミエント・デ・ガンボアの『インカ史』*Historia indical*について、別の読み方ができるかも知れない。いずれにせよ、アドルノが論争の過程で、17世紀初頭のアンデス植民地社会におけるラス・カサス主義の広がり注目したように(Adorno 1999)、「ナポリ文書」をめぐる論争が、クロニカを往々にしてそれが著された時代の文化的背景から切り離して、しかも個別の独立した作品として扱う従来の研究方法に一石を投じたのは確かである。換言すれば、クロニカは植民地時代の社会や文化を映し出す貴重な史料にもなりうるのである。

最後に、ミッチネリやラウレンチクが頑なに原文の全面公開を拒否した理由は定かでないが、アドルノが『新しい記録』の手稿をデジタル化して研究者のみならず、広く一

般の人たちにも公開した背景に、ひとつには、『新しい記録』に限らず、刊行されているクロニカが必ずしも十分な検証・分析・批判にもとづいて公刊されていない状況があるのは見逃せない。アンデス史関係に関して言えば、とりわけポロ・デ・オンデガルド、フワン・デ・ベタンソス、マルティン・デ・ムルーア、ベルナベ・コボなどのクロニカがそのような作業を経て再び公刊されるのが待たれる。まして、インターネットを通じて瞬時に情報が伝わる現在、とりわけ新しいクロニカが発見された場合、その作業が重要かつ不可決であるのは言を待たない。

注

- 1) 公式記録によれば、ブラス・バレラは1587年から93年まで、リマのイエズス会の牢獄に監禁され、司祭としての役目を勤めることがいっさい許されなかった。というのも、彼は1583年から87年まで姦通罪で同じ牢獄に監禁されたが、そのとき、退会勧奨を拒否し、無罪を訴えつづけたからである。そして、その第1回目の投獄生活のおり、すなわち、1585年と86年に総長アクワヴィヴァに書簡を送り、健康を理由にローマへの送還を要請した。その当時、ローマに滞在したアコスタはバレラの身柄をヨーロッパへ移すことをアクワヴィヴァに進言したが、その理由のひとつはバレラがペルーにいるかぎり、他人に害をおよぼす危険があるというものであった (Hyland 2003: 189-190)。EIはその事実にもとづいて、バレラがアコスタを批判したものと思われる。
- 2) インカ・ガルシラソは『インカ皇統記』でブラス・バレラおよびその作品について以下のように記している。

「権威ある卓越した作家、イエズス会士のブラス・バレラ神父……かの帝国の歴史を典雅きわまらないラテン語で書いた神父は、語学の才能に恵まれていたので、その気にさえなれば、多くの言語でそれを書くことができたであろう。ところが、私の祖国たるインカ帝国は、かくも気高い手によって書かれるに値しないともいえるのであろうか、不幸なことに、1596年のイギリス人によるカディスの破壊と略奪の折にそのラテン手稿は散逸してしまい、彼自身もその後間もなくして死んでしまった。後に私はその略奪を免れた文書を手にすることができたが、それは残ったものが失われたものの素晴らしさを偲ばせ、それゆえ一層その損失の大きさを慨嘆させる底のものであった。」(インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1985: 25)。ブラス・バレラの著作に関しては、Hyland (2003: 72-95) を参照。
- 3) インカ・ガルシラソがブラス・バレラの作品を賞賛していることに関しては、注2) を参照。アネロ・オリバは自著でインカ・ガルシラソの作品を次のように評価している。

「いずれにしても、思うに、ペルーの歴代インカ王の歴史、その発展と終末を（他の著述家よりも）巧みに、また、明確に描いているのはインカ・ガルシラソの『インカ皇統記』の第一部である。」(Oliva 1998: 36) グアマン・ボマが『新しい記録』の著者であることを裏付ける重要な史料は後述する *Compulsa ayacuchana* と *Expediente Prado Tello* である (Adomo 2000: 12-36)。
- 4) 言うまでもなく、特別なキープの存在や毒入り葡萄酒によるアタウルバ捕縛の件に関する情報の信憑性をめぐっても、研究者の間で論争が行われた。情報の内容もさることながら、ローマの会議で展示された現物からしても、後世の偽造である可能性は高い。特別なキープに関しては、ラウレンチク・ミネリ (2002: 189-192) に彼女の見解が示されているので、参考にされたい。ピサロとドミニコ会士の謀議に関しては、ペレス・フェルナンデスがその事実の欺瞞性を実証した (Pérez Fernández 1998: 395-415)。

- 5) グティエレスはラス・カサスの主張の現代的意味を問いただした示唆に富む作品の中で、こう記している。「インディオは軽蔑され、搾取されて苦しんだが、その苦しみをキリスト教信仰の名のもとに拒絶した最初の人物のひとりとは彼らと同じインディオで、とかく議論的になるフェリペ・グアマン・ポマ・デ・アヤラである。グアマン・ポマは老いて病身の身ながら、《イエス・キリストの貧しい人々》を求めてかつてのタワテンティンスーユの領土を長期にわたって旅した。…グアマン・ポマとラス・カサスの二人は、インディオが受けている不正で早すぎる死を、生者のための神に仕える忠実なしもべとして、告発した人々を代表する人物なのである。」(グティエレス 1991: 5-7)。カステリオンはグティエレスの主張をグアマン・ポマの作品にもとづいて論証し、「解放の神学」の先駆者とみなした (Castellón 1992: 85-168)。
- 6) グアマン・ポマがムルーアもしくは彼の工房と密接な協力関係にあったことは、線画と水彩画の類似性などを論拠に、1960年代から主張され、近年ではトーマス・カミンズやテレサ・ギスバートがアンデス世界に持ち込まれた西欧の絵画技法と土着の伝統的な絵画技法を詳細に分析して実証している (Cummins 1992; Gisbert 1992)。

文 献

Adomo, Rolena

- 1989 *Cronista y príncipe: la obra de Don Felipe Guamán Poma de Ayala*. Lima: PUCP.
- 1993 The Genesis of Felipe Guamán Poma de Ayala's *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. *Colonial Latin American Review* 2 (1-2), 53-91.
- 1998 Criterios de comprobación: el manuscrito Niccinelli de Nápoles y las crónicas de la conquista del Perú. *Anthropológica* 16, 369-394. Lima: PUCP.
- 1999 Novedades en el estudio actual de la cronística peruana: Las Casas, Guamán Poma y el padre Oliva. (<http://www.fas.harvard.edu/~icop/rolenaadomo.html>).
- 2000 *Guamán Poma, Writing and Resistance in Colonial Peru (2nd Edition)*. Austin: University of Texas Press.
- 2001a Contenidos y contradicciones: la obra de Felipe Guamán Poma de Ayala y las aseveraciones acerca de Blas Valera. (<http://www.ensayistas.org/filosofos/peru/guaman/adomo.html>).
- 2001b *Guamán Poma and His Illustrated Chronicle from Colonial Peru: From a Century of Scholarship to a New Era of Reading*. Copenhagen: Mueseum Tusculanum Press, University of Copenhagen and the Royal Library.

Anello Oliva, Giovanni

- 1998 *Historia del reino y provincias del Perú y vidas de los varones insignes de la Compañía de Jesús*. Edición, prólogo y notas de Carlos M. Gálvez Peña. Lima: PUCP.

Arana B, Luis and David Rodríguez Q.

- 2001 En torno a la figura histórica de Felipe Guamán Poma. Entrevista a Rolena Adomo. *Alma Mater* 20, 5-16. Lima: UNMSM.

Arellano, J. and J.A. Rodríguez Garrido

- 1999 *Edición y anotación de textos coloniales hispanoamericanos*. Madrid: Iberoamericana.

Castellón, Manuel G.

- 1992 *Guamán Poma de Ayala, pionero de la Teología de la Liberación*. Madrid: Editorial Pliegos.

Cummins, Thomas

- 1992 The uncomfortable image: Pictures and Words in Nueva Crónica i Buen Gobierno. In R. Adomo (ed.)

- Guamán Poma de Ayala. The Colonial Art of an Andean Autor*, pp.46-59. New York: Americas Society.
- Estenssoro F., Juan Carlos
 1996 ¿Historia de un fraude o fraude histórico? *Sí*, 48-53. Lima.
- Gisbert, Teresa
 1992 The artistic world of Felipe Guamán Poma de Ayala. In R. Adorno (ed.) *Guamán Poma de Ayala. The Colonial Art of an Andean Autor*, pp.75-91. New York: Americas Society.
- Guamán Poma de Ayala, Felipe
 1980 *El Primer Nueva Corónica y Buen Gobierno*. Edición de John Murra y Rolena Adorno. México: Siglo XXI Editores.
 1991 *Y no ay remedio*. Mons.Eliás Prado Tello y Alfredo Prado Prado. Lima: Centro de Investigación y Promoción Amazónica.
- グティエレス, グスタボ
 1991 『神か黄金か——甦るラス・カサス——』 柴田秀藤訳, 東京: 岩波書店。
- Hyland, Sabine
 2003 *The Jesuit and the Incas. The Extraordinary Life of Padre Blas Valera, S. J.* Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- インカ・ガルシラン・デ・ラ・ベガ, エル
 1985 『インカ皇統記 (一)』 (大航海時代時代叢書第Ⅱ期, エクストラシリーズⅠ) 牛島信明訳, 東京: 岩波書店。
- Instituto Italo-Latinoamericano
 2001 *Guamán Poma y Blas Valera. Tradición Andina e Historia Colonial*. A cura di Francesca Cantù. Roma: Antonio Pellicani Editore.
- Laurencich Minelli, Laura
 1996 Il Documento *Historia et Rudimenta Linguae Piruanorum* (学会発表原稿).
 1998 *Historia et Rudimenta Linguae Piruanorum*: ¿un estorbo o un acontecimiento? *Anthropológica* 16, 349-367. Lima: PUCP.
 2000 Breve reseña de los documentos Miccinelli en el ámbito del simposio «Guamán Poma de Ayala y Blas Valera. Tradición Andina e historia colonial», (<http://www.ucm.es/info/especulo/numero16/guampan.html>).
 2001 Las actas del coloquio Guamán Poma y Blas Valera. Tradición Andina e Historia Colonial: nuevas pistas de investigación. una nota, (http://www.ucm.es/info/especulo.numero20/act_colo/html).
 2004 Nuevas perspectivas sobre los fundamentos ideológicos del Tahuantinsuyu: lo sagrado en el mundo Inca de acuerdo a dos documentos jesuíticos secretos, (<http://www.ucm.es/info/especulo/numero25/tahuan.html>).
- ラウレンチク・ミネリ, ラウラ (編)
 2002 『インカ帝国歴史図鑑——先コロンブス期ペルーの発展, 紀元1000~1534年——』 増田義郎・竹内和世訳, 東京: 東洋書林。
- Miccinelli, Clara e Carlo Animato
 1998 *Quipu: Il Nodo Parlante dei Misteriosi Incas*. Genova: ECIG.
- Oliva S. J., Giovanni Anello
 1998 *Historia del reino y provincias del Perú y vida de los varones insignes de la Compañía de Jesús*. Edición, prólogo y notas de Carlos M. Gálvez Peña. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Ossio, Juan M.
 1998 El original del manuscrito Loyola de Fray Martín de Murúa. *Colonial Latin American Review* 7 (2), 271-

278.

- 2000 Nota sobre el Coloquio Internacional «Guamán Poma y Blas Valera: Tradición Andina e Historia Colonial»
Colonial Latin American Review 9 (1), 113-116.

Pease G.Y., Franklin

- 1978 *Del Tawantinsuyu a la Historia del Perú*. Lima: IEP.

- 1995 *Las Crónicas y los Andes*. Lima: Fondo de Cultura Económica y PUCP.

Pérez Fernández, Isacio

- 1998 Sobre la captura del inca Atahualpa: comentario crítico a un documento recientemente publicado. *Revista Andina* 32, 395-415. Cusco.

染田秀藤・友枝啓泰

- 1992 『アンデスの記録者ワマン・ボマ——インディオが描いた《真実》——』東京：平凡社。

トドロフ, ツヴェタン

- 1986 『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』及川 馥・大谷尚文・菊池良夫訳, 東京：法政大学出版局。

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図1 HACの表紙

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図2 ラテン語文書1

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図3 ラテン語文書2

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図4 ラテン語文書3

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図5 暗号文書A1

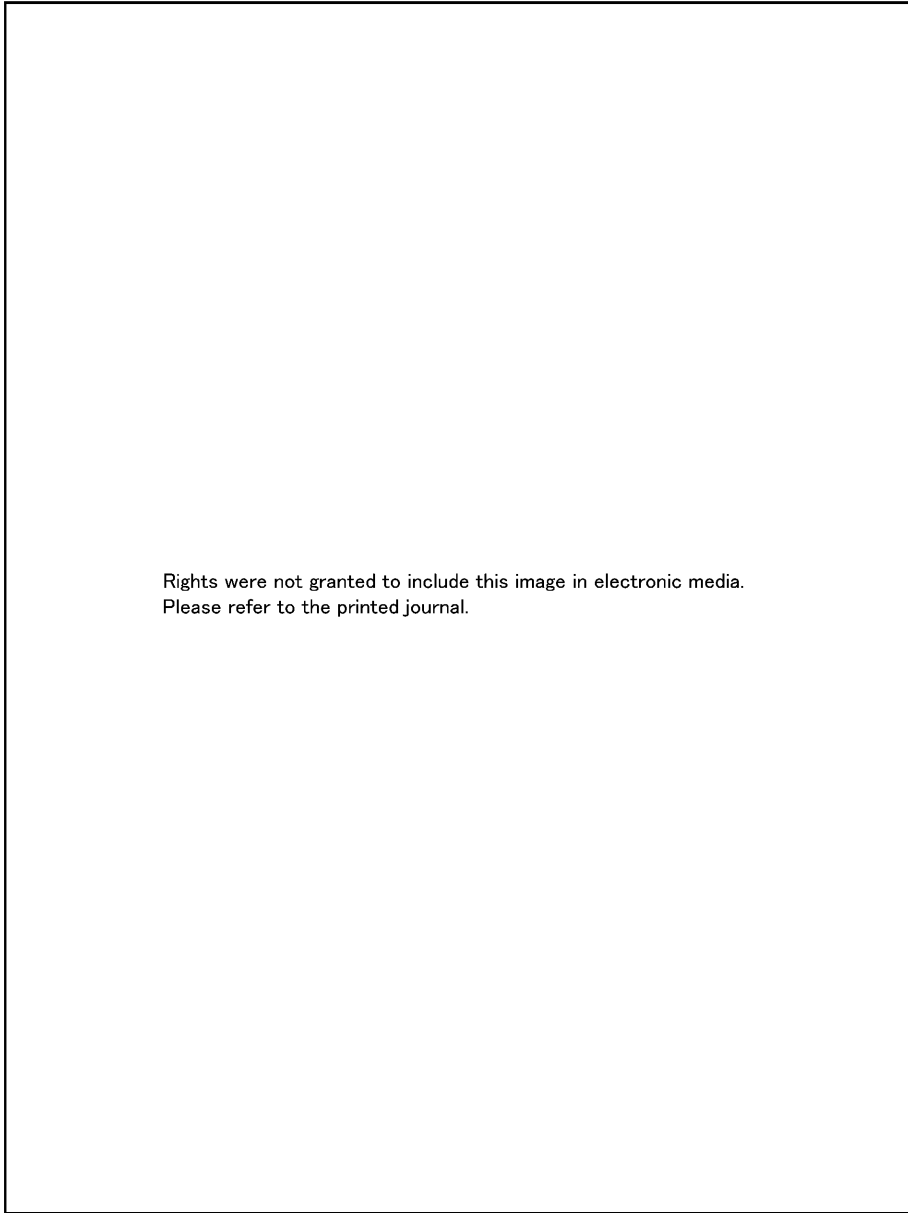


図6 暗号文書A2

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図7 暗号文書A3

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図8 スペイン語文書

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図9 genocidium

Rights were not granted to include this
image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this
image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

図10 ムルーア (左) と グァマン・ボマ (右)